



影響を受けた 一冊。

私はこの一冊に、
影響を受けた。

小鳥遊 葵

私が影響を受けた一冊。

若い頃、とはいっても高校生のころだが、私はまったく本を読まない人で、専らアウトドア志向で、日々、外で遊び廻っていた。

高校を卒業し、上京して周囲との交流で気づかされたことは、知り合った人々は結構本を読み、好きな作家がいるということだった。少し恥ずかしくなり、気は進まなかったが、本に馴染もうとした。

高校までの学生時代、多少、歴史が好きだった。とくに戦国時代が好きだったこともあり、まずはその分野かと思いついたのが、山岡壮八の「徳川家康」で、凝り性でもあり全巻読破した。面白かった。内容は正しいのかどうかは知らないが、小説とは何て想像力が必要なのだろう、と感心したことをいまでも覚えている。

しかし、この膨大な量の作品にもかなりの影響を受けたが、五木寛之が直木賞をとった、「蒼褪めた馬を見よ」を読んだときの衝撃は余りにも鮮烈だった。

リズム感、物語のスピーディな展開。デビュー作の「モスクワ愚連隊」でも紙面から音楽が聴こえるような錯覚に陥ったが、この「蒼褪めた馬を見よ」に於いても、まるで音が間近に聴こえるような気がして、戦慄しながら読み切ったその日を、いまになっても忘れられないでいる。

それからは色んな作家の本を乱読して、それなりに愉しんでいたが、私の中ではまだ、「蒼褪めた馬を見よ」を越える作品にお目にかかったことはない。

これはしかし、当時、そんなに本を読む人ではなかった私の初心さが、極端にそう感じさせたに過ぎないのかも知れない。

だが、人というものは不思議なものだ。それほどにあの作品に魅せられ、四十歳になって突然眼醒めたように小説を書き始めた。

その日から二十余年。どこでどのように足を踏み外したのか、私はいま、官能の分野の無名作家として、日々、艶かしい小説を書いている。

それでも尚、(ああ、一作でいい。あんな小説を書いてみたい)、そう念じつつ、今夜もまた、生々しい描写に苦心し続けながら。